中国に伝存する日本文献の調査
—福建、そして北京—

伍　　躍

京都大学人文科学研究所

2000年11月19日から26日にかけて、伍躍は谷井俊仁・三重大学助教授と一緒に、中国福建省を訪れて、厦門大学・福建師範大学・福建省図書館において、日本寺院旧蔵文書を中心に日本関係史料の所蔵状況を調査した。この調査の基本状況については、2001年２月20日に開かれた国際研究集会の際に谷井がすでに報告したので、重複のありそうな部分を省き、福建調査の感想と北京図書館に所蔵する日本文献のことについて、ここで述べさせて頂きたい。

一　福建

谷井が報告のなかで、「渡航前は琉球関係の文書があるのではないかと予想していたのであるが、それすらもなかった」、と指摘しているように、私も少々不思議に思った。

中国清代の福建地方法例集である『福建省例』によれば、当時、琉球使節は中国に行くたびに、福州で上陸して、そこで入国手続きをし、福建省当局から選ばれた官僚の同行で、北京に向かう、という。その入国手続きに際して、自分は琉球国王の使節であることを証明する文書を福建側に提出しなければならない。なお、対琉球外交の具体的な事務を担当する福建省地方当局には、その事務処理に際して何らかの行政文書が形成されたに違いない。このため、常識的に考えると、琉球関係文書は現在まだ福建省のどこか（たとえば檔案館）に残されているかもしれない。この前の調査では、残念ながら時間の関係で福建省檔案館での調査を行うことができなかった。

福建省については、アヘン戦争から中華民国期を経て人民共和国の成立に至るまで、福州・泉州・厦門を中心とする沿海地域では、長期間に及ぶ国内反乱や戦争がなかったが、いわゆる「解放戦争」の内戦でも国民政府軍は共産党軍に有効な抵抗を行わず台湾に敗退してしまった。このことから、史料の保存状況は、けっして悪いとは言えない。

福建省檔案館に所蔵する清代の歴史檔案は、「数十巻」あると言われるが、その詳細は分からない。情報によれば、少なくともそのうちの一巻は清末郵政関係の文書が含まれることが分かった。なお、一昨年、北京で第一歴史檔案館を訪れた際に、中国国家檔案局が国内所蔵の清代歴史檔案の全面調査を行ったことは、関係者の話で分かった。当時、調査記録の原本を見せてもらったが、未公開を理由に抄録は許されなかった。福建省についての記憶は薄い

が、福建省檔案館・厦門市檔案館のほか、大学檔案館や馬尾造船廠檔案館にも清代檔案がある、と覚えている。

中国では、文書を保管する檔案館の利用はなかなか難しいと言われるが、これは確かである。最近、学界において、檔案館の重要性は高まりつつある。この数年、中国各地の檔案館での調査から得た個人の経験としては、事前に充分な準備（たとえば、紹介状、目録の事前調査など）があれば、期待できるような成果を挙げることは、おそらく難しいことではない。

二　北京

私は今回の「国際研究集会」の資料を読む限り、中国科学院図書館（旧北京人文科学研究所蔵書の継承者）を除いて、北京図書館（現中国国家図書館）、北京大学図書館、中国第一歴史檔案館などに触れていなかったような気がする。北京図書館は、私がかつて勤務していたところであるので、記憶と手元の資料に基づいて、日本資料の状況を簡単に説明させて頂きたい。

北京図書館に所蔵する日本資料を含むすべての書物は、ほかの図書館と変わらず、購入・寄贈・接収などによって入ってきたものである。一般論として、具体的にある本がどこから、誰から、どういう状況で、値段はいくらかといった、北京図書館に入ってきた詳細については、設立以来の登録原簿と業務用カードの全部が、戦乱や革命を乗り越えて保存されている。その登録原簿は原則として公開しないが、私がそこで勤務していた頃、正当な理由があれば、所定の手続きをとったうえで、読者は関係部署の弁公室でその登録原簿を閲覧することができた。

北京図書館には、日本関係資料の保管に携わる部門が概ね四つある。

１．善本部。清代中期以前に出版された、質の優れた漢籍を保管する部門である。日本で出版された漢籍も含まれている。日本書に関する専門の目録がないので、『北京図書館善本書目』を利用して調べるしかない。しかし、この目録が編纂されたあと、善本部の蔵書はさらに増加したので、増加分のなかに日本書が含まれているかどうかは不明である。

２．分館。善本部所管以外の漢籍（いわゆる普通線装本）を管理する部門である。そこで保管される漢籍は１８０万冊にのぼると言われるが、正確な数はなお明らかにされていない。その１８０万冊の内訳は「正編」６０万冊、「簡編」１２０万冊である。ここでの「正編」とは、正式な目録を備えたもので、「簡編」とは、入った当時の登録番号だけで正式な目録がなく、閲覧のできないものである。１０年前から、その「簡編」を「正編」に合流させる作業は始まったが、一昨年から、データベース化のために、さらに特別予算を付けられたので、合流の作業はかなり進んでいる、と聞いている。

1985年前後、分館が柏林寺から今の北海に引っ越した際に、文書類を見たことはないが、まとまった和刻本と日本の写本を見たことがある。それらの写本の一部は、草書体で書かれたものだと記憶している。当時、分館を含む北京図書館のみならず、北京大学にもその草書体で書かれた日本写本を読める人がいなかった。なお、日本書の目録はなかったようである

が、例の合流作業の一環としては、将来、「海外刊本」の目録をつくる計画があり、日本書もそれに入るだろう。

3．日文採編部。洋装日本書の購入・交換・目録作成などを担当する部門である。北京図書館は、東京の国立国会図書館との間に交流関係を結んでおり、北京図書館側の交流担当の窓口は、この日文採編部である。ここには、洋装日本書の目録がある。

4．報刊部。日本を含む各国の新聞や雑誌を管理する部門である。そこの状況は分からない。

以下では、手元にある資料を元にして、私が実際に目を通した分館所蔵の明治以前に出版され、『中国館蔵和刻本漢籍目録』（王宝平編、杭州、杭州大学出版社、1995年）と『中国館蔵日人漢文書目』（王宝平編、杭州、杭州大学出版社、1997年）に収録されていない日本書（刊本・写本）の一部を列挙したい。

毛利貞斎輯『増続大広益会玉篇大全』、元禄4年（1691）刊本、１２冊。
三好似山『広益助語辭集例』、元禄7年（1694）刊本、3冊。
唐・釈広智『字記捷覧』、元禄１１年（1698）刊本、1冊。
釈盛典『韻鏡易解改正』、享保3年（1718）華洛書肆刊本、4冊。
霊苗天産『声音対』、享保5年（1720）山本常長洛陽書肆刊本、1冊。
河野通清（釈叡竜）（『中国館蔵日人漢文書目』では「釈叡龜」としているが、「釈叡竜」の誤りである）『韻鑑古義標注』、享保11年～元文3年（1726～1738）洛陽書林皇都書肆刊本、3冊。
清・林尚葵『広金石韻府』、元文2年（1737）生白堂刊本、6冊。
井口蘭雪（文炳）『経史考』、明和3年（1766）京都蘭雪斎刊本、1冊。
有馬頼徸（豊田文景）『拾璣算法』、明和6年（1769）刊本、4冊。
清・林尚葵『広金石韻府』、天明6年（1786）京都書林聖華房刊本、6冊。
寺尾東海（正長）『解経秘蔵』、寛政8年（1796）皇都書林刊本、3冊。
唐・李瀚『蒙求』、寛政12年（1800）刊本、3冊。
伊藤東涯（長胤）『助辞考』、寛政年間文泉堂刊本、1冊。
清・紀昀『欽定四庫全書総目』、文化2年（1805）古香堂慶元堂刊本、6冊。
清・邵長蘅『古今韻略』、文化2年（1805）刊本、4冊。
清・紀昀『欽定四庫全書総目』、文化11年（1814）刊本、6冊。
清・王鳴玉『通叶集覧』、文化13年（1816）刊本、2冊。
三宅橘園『助語審象』、文化14年（1817）刊本、3冊。
坂部広胖『点窟指南録』、文化年間刊本、１５冊。
穂積熙『医籍考』、文政元年（1818）写本、1冊。
清・顧修『彙刻書目初編』、文政元年（1818）慶元堂刊本、１０冊、御学問所蔵版。
近藤正斎（守重）『正斎書籍考』、文政6年（1823）大阪前川文栄堂刊本、3冊。
津阪孝綽（東陽）『訳准笑話』、文政9年（1826）稽古精舎刊本、1冊。

千葉胤秀（雄七）『算学新書』、文政13年（1830）刊本、４冊。
宋・陳彭年『大宋重修広韻』、天保２年（1831）刊本、５冊。
清・余熙『頭字韻』、天保３年（1832）稽古精舎刊本、１冊。
宋・丁度『集韻』、天保９年（1838）官板御書籍発行所刊本、１０冊。
壷井義知『本朝刀剣略記』、天保10年（1839）伴直方写本、１冊。
松原清『古刀集』、天保14年（1843）写本、１冊。
慶忍『六書訓蒙編』、弘化３年（1846）刊本、楊守敬飛青閣旧蔵書、１冊。
米谷金城（寅）・村上恒夫『墓碑考』、弘化３年（1846）刊本、２冊。
藤原佐世『日本国見在書目録』、嘉永４年（1851）景印本、１冊。
朝川善庵（鼎）『鄭将軍成功伝碑』、嘉永５年（1852）写本、１冊。

次には、明治以後出版された（出版時期の分からない書物も）、日本書の伝存状況の調査に対し役に立つと思われるものを列挙する。

胡維徳『大清駐日本使署蔵書書目表』、宣統２年（1910）活字本、２冊。
黎庶昌『拙尊園存書目』、抄本、１冊。「拙尊園」は黎庶昌のことであり、この本は彼の蔵書目録であるに違いない。
広州市市立図書博物館『広州市市立図書博物館接収前由社会局寄存広東大学朝日新聞社移交書籍清冊』、民国年間複写本、１冊。これは、おそらく戦後国民党の広州市政府社会局が接収して、本来朝日新聞社（広州）が所有した図書の目録である。
澁江全善・森立之ら『経籍訪古志』、楊守敬日本写本、６冊。付録：市野迷庵（光善）『読書指南』。楊守敬校語あり。
釈空海『篆隷万象名義』、日本写本、８冊、楊守敬序あり。
釈空海『篆隷万象名義』、日本写本、２冊。
多紀元胤『聿修堂蔵書目録』、日本写本、１冊。
岡本況斎（孝）『経籍考』、日本写本、１冊。

以上、北京図書館における日本書の所蔵状況の概要について説明した。

『中国館蔵和刻本目録』と『中国館蔵日人漢文書目』の編纂にあたって、「北京分館」の調査を担当した者が提供したのは、おそらく当時すでに明らかにされたデータの全部ではない、と私は考えている。その担当者が提供した明治以後のものを含めて全部で「１０６点」ある、との調査結果に対し、私はずっと疑問を持っている。たとえば、『中国館蔵和刻本目録』によれば、「北京分館」所蔵の史部の和刻本は、「１５点」とされている。しかし、1988年から1991年にかけて、私たちが実際に数えた史部目録類（総数１９４８点、合計１５４０６冊）と史部金石類（総数１４５６点、合計１２４２９冊）に含まれている（景印、写本、活字を除く）和刻本は、すでに２０点を超える。いずれにしても、北京図書館分館に所蔵する日本書の全体状況については、管見の限り、明治時代以後のものが含まれれば、先に挙げたリス

トは、おそらく全体の数十分の一以下にとどまるものと考える。なお、北海分館建物の補修工事が終り、さる2000年12月18日から読者の利用は再開されたので、現地での調査は可能になった。

最後に、中国第一歴史檔案館について付言しておこう。

数年前、韓国のソウル市立大学は、中国第一歴史檔案館と合同して、中国檔案のなかから朝鮮半島関係資料（もちろん日韓関係も含む）を集めて、資料集５冊を編纂する作業を始めた。この作業は、ソウル市立大学側の予算上の問題で、資料集２冊を出版した後、現在は止まっているままである、という中国側関係者の話を聞いている。すでに出版された資料集によれば、日韓合併までの檔案資料が含まれることが分かった。私自身は、その資料集に含まれていない清代前期の朝鮮半島関係資料を見つけた経験がある。

江戸時代、日中間では正式な外交関係が結ばれていなかったから、地方政府レベルの往来文書はあったが、中央政府間の往来文書はなかったと考えてもよいだろう。ところで、かつて中国第一歴史檔案館で資料を閲覧していたところ、「軍機処」、「総理各国事務衙門」、「外務部」檔案目録のなかで「日本」という項目を見たことがある。中身はどんなものかは分からないが、今後、可能ならば調査してみたいと思う。